



# 妄想アストラルフィニッシュ

-BADEND CG集-

「ち……んっ……」は……  
レ○チエルは身動きがとれないようにされ、  
秘所を全て晒す様にして拘束されていた。

「私にこんな扱いをするなんて、大層な趣味の屑ね」

「今すぐ解放するのが身のためだと思っただけれどっ」

おそろく近くにいるであろう自身を拘束した者  
に問いかける。  
しかし、無機質な部屋の中にただ声が響くばかり。

「……無視？拘束した女性の前にも出られないなんて  
本当に屑でゴミね」



部屋に地鳴りのような音が響き、それとともに  
細長いケーブルがレ○チエルに向かってのびていく。

「これは何のつもりかしら。。。まあ、想像は。。。あ、んっ！」

彼女の言葉を遮るようにケーブルの先端のクリップが、  
乳首と陰核を挟みあげた。

「拷問のつもり？この程度。んっ。。。！」

この程度ならどうという事は無いはずの彼女の身体が  
むしろゆい違和感に襲われる。

「んっの。。。ん。。。ん。。。ん。。。ん。。。ん。。。私を徹底して辱め  
ようというのかしら、レ○チエルのこの程度でっ。。。あ。。。あざはかね」





ケーブルがのびてきた様に、無機質な音とともに  
巨大なパイプはせり出し、躊躇いなく彼女の秘部を貫く。

「おおっ！…んっ、ぎ…いっ、いぎ、なり！おっ！ぬっ、ぎっ！」

執拗に電流で煽られ弛緩した身体は、抵抗なく異物を  
受け入れてしまう。

「こんなの…あんっ！屈辱…！出てきなさい！！殺し…んっ！」

彼女の抵抗をあざ笑うかの様にパイプが強烈に振動し  
秘部を責め立てる。

「んぎっ！あっ！やっめええ！今すぐこれをおろっ！あっ」

パイプに多量に塗り込まれていた強力な粘着媚薬は  
彼女の理性を完全に蝕んでいく。

「やっ！んんん！あああ！とめっ！なっ！んんん！んんん！」

「だめえっ！これっ！いじようはあ！あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！」

「いつあああああああああ！あ！あ！あ！あ！あ！あ！あ！あ！あ！あ！」



絶頂を迎えた後も機械の責め手は休まる事は無く  
彼女の意識をかき乱していく。

「あああっ！あっあっ！んううっ」

隙を見て自分を拘束した相手に死以上の屈辱を、そう  
考えていたはずの彼女だったが、迫りくる快楽の波に  
抵抗すらできなくなっていく。

そんな彼女の視界が突然間に覆われる。  
大きな器具が彼女の頭部を覆い隠す様にかぶさった。

「ふあああ！んっ！これいじよう、なにをっ…おっ！？ひぎっ」

「なっ！なにかがっ！あたまのなかにい！？ひっあああん！」

凌辱を受け消耗しきっている彼女は機械の発する  
洗脳波による脳への干渉に抵抗することができない。

「だ、めえ！だめ、よお…でも…いいのっ…きもち…ら…  
っっ！いいわけない！感じてないっっ！」

「あああああっ！またっ！きもちいいのくるのおっ！」

全身を駆け巡る快楽の波は既に彼女の身体を完全に飲み込んでいた。発する言葉すら快楽を求めるだけの甘く、媚びたものに变化していく。




彼女に残った最後の意思も快楽に流されていく。

「ちくびもっお〇んごもおしりもおっ♡きもちいいのっ！  
「こんなのっ！きもちいいのっ！きもちいいのっ！……ちがうわ……」  
「アイっ♡せんしんでいっひやう♡イクっイクっ！」  
「どう、ちがうわ。大事なのは、快楽よ……」

心も身体も望んだ絶頂を迎える最中、彼女の口から最後のかげらがこぼれ落ちる。

「〇〇〇〇〇〇」

そのかすかな声は次の瞬間、大きな嬌声に飲み込まれ掻き消えた。



レ○チエルIIア○カードがその身を快楽に明け渡し  
幾許かの時が過ぎた。  
彼女は既に性的快楽を享受し主に奉仕する性奴隷へ  
と成り果てていた。  
その浅ましく性欲に溺れ、よだれと愛液を垂れ流す様  
はかつての彼女の面影を一切感じさせない。

心も身体も完全に性欲の虜になり、常識すらも快楽  
至上主義に書き換えられた彼女はより刺激的な快楽  
を求め続ける。

今日もまた機械に作られた本物の意思と心で……。





「まさか、私がこんな無様を晒すなんて……」  
突如召喚された奇怪な植物に縛り上げられる。  
身動きできぬよう縛り上げた彼女の肉体を値踏み  
するかのように触手がうごめく。

「うっっ、無駄に丈夫な…んぶっ!」

ツタをほどこうと身じろぎをする彼女の口に蠢いていた  
花弁の一つが捻じ込まれる。

「んぐっ…んぐっ!なにをっ!んむっ!」

口内に侵入した花弁からはこぼれる程の蜜が溢れ出し  
彼女は抵抗するもそれを飲み込んでいく。  
その蜜は強い媚薬効果を持ち、抵抗を妨げるものであった。

「んんっ…んんっ、んっ、はぶっ、ま、まだ溢れ…いつ!」

蜜に意識を奪われる彼女の乳首に触手が近づき  
何かを注入する。





触手針をさされた彼女の胸が突然はち切れる程の大きさに膨らんだ。

「あえ……らによこれ……わたくひのむねがあ……」

「んっ……かららも、あついい……んっ、くうう……」

濡れる程の蜜を飲み意識は混濁し、舌は呂律が回らず、身体は熱く火照っている。

そんな彼女の秘部を蜜をまとった触手が優しくこすりあげた。

「んあっ！……やめ……いまはあ……かららが、へんらからあ……」

もどかしい刺激に膨らんだ胸が熱をおびていく。

彼女は残った理性を働かせなんとか踏みとどまっていた。そんな必死の抵抗をあざ笑うかの様に細いツタが彼女の胸を強く締め上げる。

「あ、が……」

媚薬蜜に支配され情欲を溜め込んだ肉体は彼女に声にならない程の強烈な快楽をもたらした。同時に本来あり得ない液体が彼女の胸から噴き出した。

「なんれっ！？わたくひからあ、ぼ、ぼにゆう、が、あっ！  
いあっ！しぼるのだめっだめえ！」

戸惑いを口にする彼女に構わず、ツタは彼女の胸から液体を搾り続けた。





「んぐっ！くっ、んぐっ、とるとるの。あまいみつう……」

快樂と蜜とで狂った彼女の口に再び花卉が捻じ込まれ  
さらに蜜が注がれていく。  
今や彼女は胸を搾られながら性器や不浄の穴まで犯され  
ている。

「ぶはっ……んあっ！しゅいっ！しよくしゅっ、ち○ぽっ！」

植物は彼女の体液を摂取するために延々と彼女を責め  
たて、彼女はそれに答える様に嬌声をあげた。



彼女はかつて何者であったのだろうか。  
かつての彼女がどれほど畏怖や畏敬の対象となり  
どれほど偉大で尊大な者であったとしても今ここに  
いるのは植物に餌を受け取り代償に自身の体液を  
搾られるだけの家畜であった。  
彼女自身は何者であったかなど最早思い出す事も  
無いであろう。

今や彼女にとっての全ては、与えてくれる蜜と  
快樂だけしかないのだから……



多くの資産家が集まる秘密の宴席。  
数多くのVIPが接待を受けて楽しむその空間に  
一際大きなどよめきが起きた。

「おち……。これが、あの……」

「皆様にはまだ紹介しておりませんでしたな。おい、お前」

「はい。わたくし、本日皆様の給仕をさせていただきます。  
レ○チエルともうします」



「例の姫様のこのような姿を見るとは」

「ククッ…実に無様で良いですなあ」

周囲の好奇の視線が集中し、彼女はそれだけで大いに  
昂ぶってしまう。

「…あっ…ん…」

「おや？視線だけで…」まで濡らすとは、これはこれは」

「あっ…主人様に調教して頂いて、わたくし…んっ  
奉仕の喜びを知りましたの」





「奉仕の喜びを知った身体とは、どういったものですか？」

「あんっ♡お客様。。。そんな、いきなりっ♡」

我慢できなくなった男の一人が彼女の身体に背後から組み付き身体をまさぐる。  
彼女は驚きつつも抵抗は一切しない。

「構いませんよ。これは仕込み済みなので、なあ？」

「はいっ♡私の身体をお楽しみくださいませっ♡」

既に相手を誘う様にしどろに濡れた陰裂を男の剛直が貫く。

「ひああの……す……いいっ♡奥までえ……！」

「おお……これが例の姫様の……！素晴らしい！」

彼女達の行為を皮切りに他のメイド達も行為に及びはじめた。

「あちらも盛り上がりはじめたようだな。おい、私のモノはどうだ？喘ぐだけではわからんぞ」

「もっ、申し訳ございません！貴方様のお○んぼっ♡……あつくてっ、かたくてっ、とっっても素敵ですっ♡」





「ぬう！これほどまでとはー！そんなら……んんんんん！」

「あつあつああんつ！くださいの♡わたくしのお〇んこの  
貴方様のせいえきでっ、イかせてくださいらっらっらっ♡♡」

男は躊躇い無く彼女の中に精を吐き出した。

「きたあああつ！…びゅくびゅくきてますう♡貴方様の  
せいえきでっ……わたくしのしきゅうらっばいい♡」



「ふう…実に素晴らしいメイドですな。」

「んっ…はあの…あつ、ありがとうございますっ♡♡♡」

「おい、休む暇はないぞ。まだまだお前を味わいたいという方はいるんだ」

「はい。承知いたしました…♡♡♡主人様、全てのお客様に誠心誠意♡♡奉仕させていただきます…♡♡♡」

そう言って彼女は彼女を待つ人々の中へと消えていった。



豪華絢爛な会場に引けを取らない程艶やかな嬌声が響き渡る。  
彼女達は自ら身体を差し出し、跪く。  
かわるがわる交わり痴態を晒し主人に称賛され歓喜する。  
今日もまた別の日も、メイド達の饗宴は終わらない。

凡庸な人間だと侮っていた。しかし、装着されるだけで絶対服従を強制される様な強力無比な呪具などただの一般人が持っているようななどとは思いつきもなかった。

「なぜ、私がこのような格好を…」

首輪を繋がれた彼女は、耳と尻尾をつけられまさしく犬と同様に扱われていた。

「……死にたくなければ、この悪趣味な行為を今すぐに止めさないと……ん、くっ……！」

どれだけ反発しても、首輪の魔力が彼女に反逆を許さない。その上、首輪は彼女を本物の雌犬にすべく劣情を催させる。



「なっ!? 私に野外でそんな事をさせようというの……!」

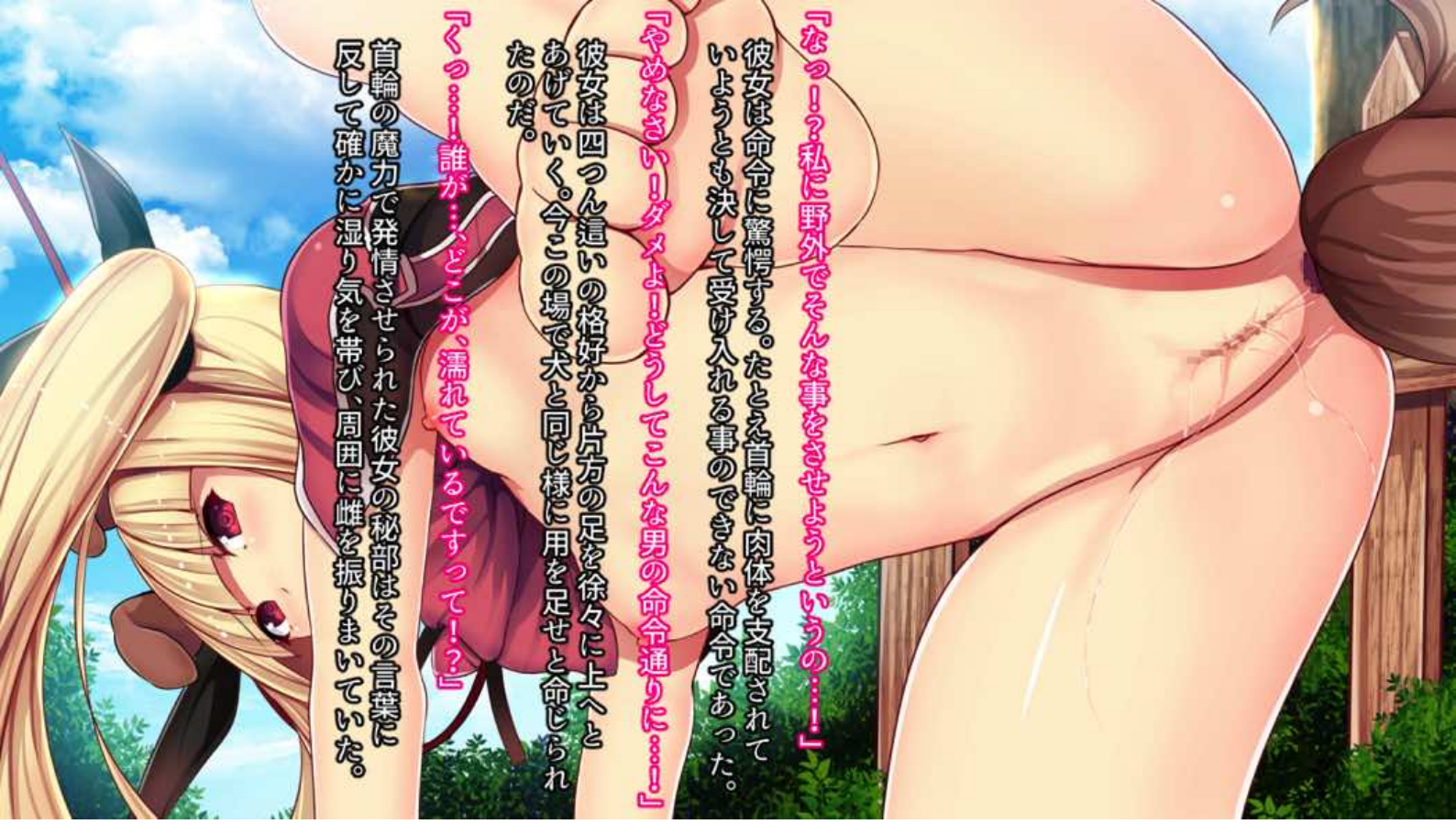
彼女は命令に驚愕する。たとえ首輪に肉体を支配されていようとも決して受け入れる事のできない命令であった。

「やめなさい! ダメよ! どうしてこんな男の命令通りに……!」

彼女は四つん這いの格好から片方の足を徐々に上へとあげていく。今この場で犬と同じ様に用を足せと命じられたのだ。

「くっ……誰が……!」

首輪の魔力で発情させられた彼女の秘部はその言葉と反して確かに湿り気を持ち、周囲に雌を振りまいていた。





「っ……止めなさい、これ以上わたくしに、なだを……！」

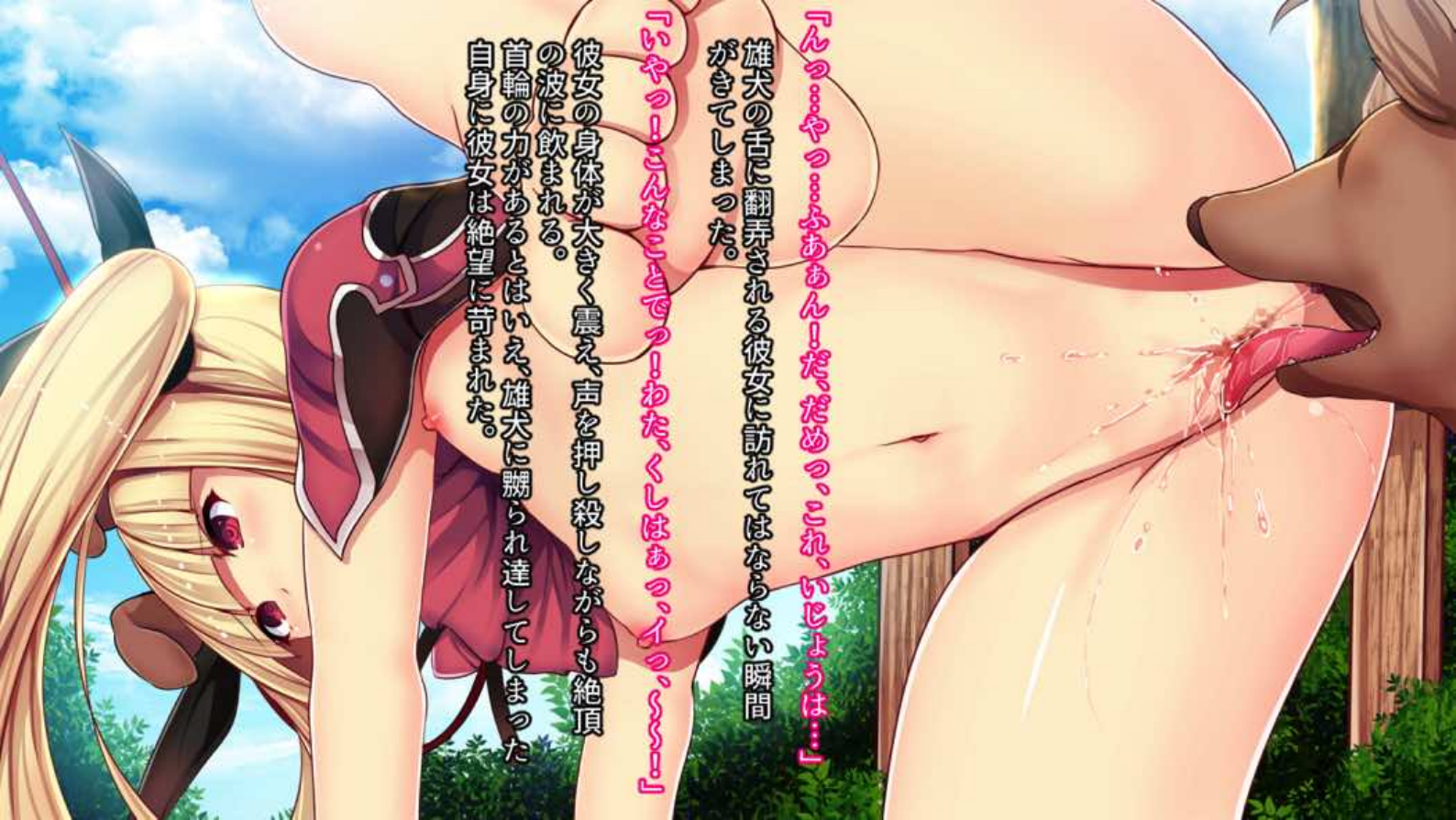
観察するだけで手を下す様子がない事に彼女は戦慄する。

そんな彼女の股ぐらにひどく興奮した様子の雄犬が近づき、濡れた秘部を舐め上げた。

「ひっ……いや……気色、悪いのよ……やめて……ひあぁっ……！」

発情させられている彼女は雄犬のべたつく舌の感触に徐々に声を上擦らせていった。



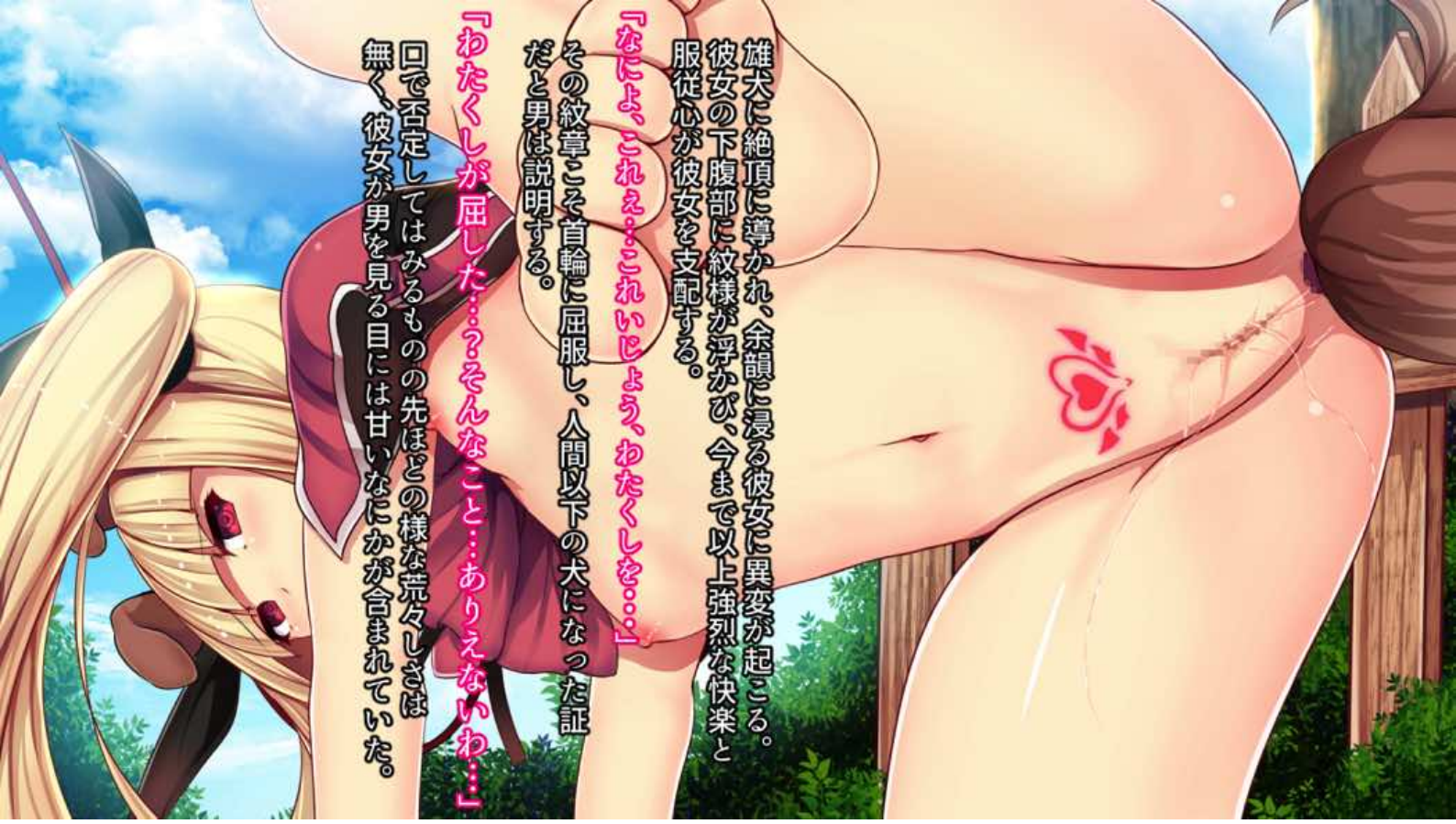


「んっ…やっ…ふぁあん!だ、だめっ、これ、いじょうは…」

雄犬の舌に翻弄される彼女に訪れてはならない瞬間がきてしまった。

「いやっ!こんなことでっ!わたし、くしはあっ、いっ、くっ!」

彼女の身体が大きく震え、声を押し殺しながらも絶頂の波に飲まれる。首輪の力があるとはいえ、雄犬に蹴られ達してしまった自身に彼女は絶望に苛まれた。



雄犬に絶頂に導かれ、余韻に浸る彼女に異変が起こる。  
彼女の下腹部に紋様が浮かび、今まで以上強烈な快楽と  
服従心が彼女を支配する。

「なによ、これえ……これいじょう、わたくしを……」

その紋章こそ首輪に屈服し、人間以下の犬になった証  
だと男は説明する。

「わたくしが屈した……そんなこと……ありえないわ……」

口で否定してはみるものの先ほどの様な荒々しさは  
無く、彼女が男を見る目には甘いなにかが含まれていた。



「あっーやあっー！また…またイっちゃ…つ！……！」  
彼女の身体が大きく震え、再び絶頂に達する。


「やっ…だめ…みられてるのに…でちゃうっっっ…」  
あるうことか、殺意さえ抱いた相手の前で絶頂の余韻に浸りながら彼女はどこか幸福そうに失禁した。

「…ごめんなさい…こんな惨めな私の…下品な姿を…」  
熱に浮かされた顔で謝る彼女の頭を男は優しく撫で、  
労いの言葉をかける。  
淫紋が怪しく輝き、彼女の目が恍惚な笑みを讀んで男を見上げた。

「あつ…こんな惨めな私に…なんて、あたたかな言葉を…」  
「私は、人間以下の雌犬…そんなわたしを大切にしてくれるなんて…とても、やさしい…ご主人様…」



一數日後一



乾いた鎖の音と大地を踏む湿った音が交差する。自分を大切に飼ってくれる男に彼女は服従する。酷く惨めに何もかも打ち砕かれた自分を優しく扱ってくれる男こそ、今の彼女のすべてだった。この男に褒められたい、愛してほしい、主人に服従できるだけで全身が熱くなる。今の彼女は身も心も男の虜になった、完全な犬というほかなかった。

「わんっ、わんわんっ。くうううん」  
足元に擦りつく彼女に男は命令する。

「はいっ！ご主人様、はしたないお〇んこ！一覽になってください！♡」

そう言うと彼女は男の前で犬が主人に芸を披露するかの様に服従の雌犬ポーズをとる。



そんな彼女に男が頭を撫でてやると、彼女は幸せの絶頂に達し、瞳を蕩けさせ股間を濡らす

「あ、ありがとうございます！わたくしは、わたくしは……とっても幸せな雌犬です♡



そこにかつての面影など微塵も存在しない。  
そんな彼女の下腹部には隷属の証である紋章が彼女の幸せに呼応するように怪しく  
光輝いていた…。

「油断したわ…あの子は逃がせたけど…」

周田は不快に粘つく黒い塊に覆われていた。彼女はある重要な役割を持つ少女を助けるために戦闘したが敗北し、この蟲の塊に飲み込まれた。

「ぐっ…気色悪いわね…」

黒く粘つくそれは彼女の強い力を自身のものにしてしまうと絡みつき、吸い上げていく。

「あの子や…無事なら大丈夫ね…んっ…くっ…！」

力を吸われ続けるこの環境ではうまく能力を使うことができず彼女はなされるがままだった。







「このままコレの餌になるなんてごめんなのだけれど……」

試行錯誤を繰り返すものの状況は変わらず、彼女は  
身体力が抜けていくのを感じていた。

「……この程度じゃ、まだ……いぎいっ……」

なんとか意識を保とうとする彼女の身体に突然  
強い衝撃が走った。

「あ……が……この、蟲……」

苦痛の声を上げる彼女の秘部を怪しくぬめった太い触手  
が貫いた。  
力を吸い取られて弛緩していた彼女の中に触手は容易く  
侵入していった。

「ひっ……ああ……もうやめなさいっ……」

彼女を貫いた触手は激しく蠢きその粘液を彼女の中に塗りたくる。粘液を塗られた彼女の秘部は痛みを快感にすり変えられていった。

「あっ！なに……よっ！なかで……ふるえてえっ！」

激しく蠢いていた触手が彼女の中で一際大きく脈打ち先程のまですは違った粘液を吐き出した。

「あっ、あっ……ああああああ……」

どくどくと大量の粘液を注がれ彼女は望まぬ絶頂を迎えてしまった。





「あ……あう……」

放心状態の彼女に周囲の黒い塊が大量にまとわりつく、それと同時に彼女の耳に忌まわしい声が響く。

「才前……力……強い……印……蟲……産む……カ……我……物」

そう言いつつ、彼女の下腹部に怪しく光る烙印を押し付けた。

「これは……あの蟲の……ら……ん……ん……？」

力を奪われ続ける彼女は徐々に意識を薄れさせていった。

周囲の黒い塊が彼女を取り込もうと大きく動き始める。

「はなして……くるなあっ……ひっ……だめっ……いやああ……」

彼女の抵抗も空しく、力なく響く声とともに彼女の身体は徐々に飲み込まれていく。



「あつーあつー！ひあああー！イクつ、イクつ！」

既に彼女は黒い塊に全身を飲み込まれつつあった。粘つく塊は強い力を奪い取るために彼女を徹底的に齧り、取り込む。

「んおおおー！だめつ、もう、おなかいっぱい！いいい！」

黒い塊は彼女を飲み込みながらその肉体に大量の粘液を注ぎ続ける。それらは彼女の全てを奪うため。その強大な力を自身と蟲達の糧をするための準備であった。彼女は力を奪われながらの責め苦に意識を失い、完全に飲み込まれてしまった。



彼女がその肉体を取り込まれてから、しばらくの時があった。

彼女は黒い塊の中で無理矢理に開発された身体を悶えさせながら、触手から栄養を与えられ家畜の様に生かされていた。

「んぶっ…んくっ…んっ、あむっちゅるっ」

長期間にわたる拘束と開発は彼女の抵抗を失わせていた。

（まだ、あの子が残っているわ…）

彼女は自身が救った少女がここから解放してくれる事を信じて、凌辱に耐え続けた。

そんな彼女は目を黒い粘膜に覆われ、感覚も意識も朦朧としており、その小さな身体に不釣り合いな程に胸と腹が膨らんでいる事に、彼女は気付いていなかった。





「ぢはっ……あっ……」  
触手が彼女の口元から離れるとその口から切なげな声  
が漏れ、秘部は熱く濡れはじめる。

「胸もあそこも……じんじんする……」

肌に触れるすべてに身体が反応し快楽を感じてしまう  
程に彼女の肉体は作りかえられてしまっていた。

「ひっ……胸がはって……おなかも、苦しい……私の  
身体、いったいどうなって……」



「いぎいっ!? お、おなかか…なに、か…くる…?」  
彼女に植え付けられた烙印が怪しく光り始める。

「あきっ! ひああ! だめえっ! なに、これえ!」

烙印は開発された彼女の性感を更に高め、彼女は感じた事のない更なる快感に導かれる。





「やっ！あああっ！あっ……でるっでるっでるっでるっでるっ！」  
彼女の嬌声とともにその身体から蟲達の卵が産み落とされた。

「いっぎ！あっ♡あっ♡ああああああん♡！」  
今まで受け入れてきた触手よりも大きい卵が身体から出て行く度に、彼女は嬌声を上げる。それは受け止めきれない快樂が彼女にもたらした悲鳴だった。

「ひっ♡あっ♡まだ、でるっでるっでるっでるっでるっ！」  
彼女は感じたことのない快樂に酔いながら多くの卵を産み落とし続けた。



最初の産卵からしばらくして、彼女は完全に快楽に囚われていた。

そんな彼女の身体には消えては現れていたはずの烙印が消えずに煌々と光っていた。  
抵抗する心を完全に失った今烙印は消える事無く彼女に快楽を与え続けていた。

「ひああああっ♡す♡す♡す♡、またくるう♡♡！」




「いやああ！なんでこんなにきもちいいんだよおお♡」  
彼女が助けはらずだった少女の絶叫が彼女の隣で響く。  
少女も同じように取り込まれ、苗床に変えられてしまっ  
ていたのだった。

「あっ♡イっくうっ！うまれりゆうう！」

今の彼女は少女が自分と同じ境遇に堕ちている事など  
どうでもいい事だった。

自身の力を産み落とした蟲に託し、産んだ蟲にまた犯さ  
れる。

その繰り返しこそ、かつての高貴なままの彼女では知る  
事のできなかつた、苗床となつてはじめて辿り着ける  
至上の悦楽であった。



粘つく黒い塊の中に今日も響く淫猥な声。卵を吐き出し  
きればまた次の種を植え付ける陵辱地獄。妊娠すれば  
その後待つのには産卵絶頂地獄。ここに囚われた苗床達  
は死ぬまで快楽の虜となりその状況を楽しみ続ける。  
黒い塊はただ卵を産むだけの苗床を増やし続け取り  
込んだ物の力を奪い無限に増大していくのであった。





**妄想アストラルフィニッシュ**  
-BADEND CG集-